

中国語学科創立の頃

——二十世紀後半を振り返る——

鈴木 陽 一

本誌の編集担当である孫さんから、大里さんの退任を記念して筆を執れとのご下命があった。考えてみると、大里さんと私は中国語学科設立の際に初めて出会い、それから二十数年間、神奈川県立神奈川大学或いは学科の中で専らお付き合いいただいていた。従って、大里さんについて私が語るとすれば、必然的に中国語学科のことを語ることになる。また、文学を専攻する私が大里さんの学問について語るのは烏滸がましいし、おそらく孫さんがその方面については語ってくれるはずである。そこで、大里さんの研究上の国際交流と様々な研究成果によって我々が裨益されるところが極めて大きいことのみを挙げ、私自身の残り時間も少ないことから、学科の設立当時を振り返りつつ、大里さんをはじめとする諸先輩、友人について語ることにした。なお、文章の性格から、敬称は全て省略に従い、親しみを込めて「さん」という呼称を使ったことをお許し願いたい。

菅野元理事長の鶴の一声で、中国語学科の設立が決まった。一九八六年のことである。そこから二年間の準備期間を経て一九八八年に中国語学科はスタートした。その時のメンバーが尾上兼英、小島晋治、故那須清、大里浩秋、吉川良和（現本学非常勤講師）、佐藤進（現北海道文教大学教授）、山口建治の各先生方に私という

顔ぶれであった。その後、佐藤さんに替わって大西さん（現東大教授）、那須さんに替わって松村文芳となるなどメンバーは大きく変わりつつある。

学科を設立する時の理念をどうするか、これが一つの分岐点となった。いくつかの大学、特に外国語系の大学、学部のカリキュラムを調べ、自分たちの進む道を決めた。結論は、外国語学部の要素と文学部（文学と歴史学）の要素を併せ持つ学科にすることであった。その当時日中間の経済交流は日に日に盛んになり、将来において、中国語の受容が大幅に伸びることが漠然と期待されており、中国語の履修者も増えつつあったが、その一方で、中国への関心は、依然として中国の伝統的文化への憧れから生まれているのだということも事実であった。そこで、中国の伝統と文化も理解していて、なおかつ中国語の喋れる人材を育成しようという厚かましい理念を掲げたのである。

同時に神大のイメージ、外国語学部の名称から考えて、アカデミックな人材よりも実用的な能力のある人材を育てようということも、学科の方針となった。そこで、英語と中国語とコンピュータを使える人材を育てるというのをキャッチコピーとして売り込むことにした。発足当時、中国語の他に英語一〇単位、情報の基礎科目を必修にしたのはそうした狙いだった。この考えは正解であったと私は今でも思っているが、大学にも学科にもこのコピーを現実のものとする力が不足していたため、必ずしもうまくいかなかったのは残念である。

さて、このコンセプトとコピーはほとんどが山口さんと鈴木のアイディアによるもので、実際に学科を運営していく段になると、個性の強い教員が集まっていて、それぞれ学問観や教育観も時に大きく、時に微妙に異なるため、いろいろ問題も出てきた。特に学生の自主性、主体性をどの程度重んずるかで、——私は自分が怠

け者の学生だったので、学生など信用できないという考え方であったし、今もそう思っている——、大里さんと私とはしばしば対立したように記憶する。これに加えて、中国の国内事情、日中関係、大学をめぐる諸情勢が、学科設立直後から大きく変化していったことは、誕生間もない学科にとっては大きな痛手となった。

まずは一九八九年の天安門事件である。設立二年目で、名目倍率が十倍を超えていた中国語学科の受験生が一九九〇年以降日本全国の中国語関係の学科と共通の運命をたどり、激減した。第二外国語として中国を履修するものも半減した。その背後で、日中間の経済的結びつきの強化とは裏腹に、いわゆる「謙中」意識なるものが醸成されていったことも見逃せない。

ところで、天安門事件の直後、民主化運動を支持した留学生が帰国できなくなり、困難に陥った時の大里さんの行動は見事なものだった。具体的な支援活動そのものもさることながら、大里さんが留学生たちと人間と人間として付き合っているのだということがひしひしと伝わってきたのだ。これは今でも鮮明な印象がある。同時に、私はその時の記憶が中国の知識人の心の中に残り、現在の神大が進めている国際交流に目には見えないう、しかし大きな力を与えてくれているように思っている。

さて、時代は九十年代に入る。バブル崩壊が始まり、それへの対応ということか、見境なしの「規制緩和」が始まった。新しい大学、学部・学科の増設が始まり、郊外へ出て行った大学も一斉に首都圏に戻ってきた。教養教育は大綱化とともに崩壊し、形式だけを整えた大学院の乱立も始まる。大学は入りたくても入れないものではなく、入ろうと思えばどこかには入れるものになったのである。この結果、見かけは依然として受験地獄のようでありながら、実態としては中堅どころの大学の偏差値が急速に下降する。勉強しない学生、いや

勉強などしなくてもよいと思っっている若者が一斉に大学に入学してくる一方で、社会はバブル時代そのままにひたすら実利追求、それに役立つ人材を露骨に求める、大学（学問、地道な勉強、真摯な思考）にとつての冬の時代は一層ひどくなっている。

こうした状況下では、中国語学科の教員の考え方の違いも目立ってくる。乱暴にまとめてしまえば、学生を勉強させるよう、どのように巧みに或いは厳しく管理していくのかという方法をめぐっている議論をしてきた。語学系、文学系、歴史系と出自を異にする教員によって成り立つ中国語学科では、容易に意見はまとまらないのだが、我々のいいところは、そうした議論を堂々と公明正大に行ってきたところだ。但し、大里さんは一人「我が道を行く」で、多分設立当時と変わらない態度で学生と付き合ってきたように思うし、少なくとも管理するというような感覚は全く持ち合わせていないように見える。それがのんびり屋である大里さんの個性だと言ってしまうこともできないわけではないのだが、それは違うと私は思う。学科設立の時や天安門事件の時の対応、その後の学内外での様々な人々とのつきあい、学生への指導、いつでもどこでも、相手が偉くとも偉くなくとも大里さんの態度は同じだったのだ。これは、大里さんがいつでも相手と対等の人間と見なし、自然に振る舞っていたからだと思う。だからこそ、かつては、中国語学科の最も優秀な学生と最も問題のある学生とが大里さんのゼミを選んでいたので。だが、残念なことに、この数年、学生の側にそうした大里さんの魅力を見極める目がなくなっていたように思われ、そのことは学科全体が直面する問題の深刻さを表しているように感じる。残り時間の少なくなってきた私ではあるが、大里さんたちと喧嘩もしながら築いてきた学科を少しでもよい形で次世代にバトンタッチできるよう頑張らねばと思う。

大里さんには、六十年代、七十年代のことについてもっと伺いたいことがあります。その時代のことを話し始めると、ひよっとしたら議論になり、喧嘩になるかもしれません。尾上さんが小島さんが戦後のことを語り伝えてくれたように、私たちもあの時期のことを語り伝える義務があります。そのためには、我々の世代はまだまだ厚かましく、元気で生きていかねばなりません。まずは、我々の世代の先達として、しぶとく、たたかに、そして大里さんらしくのんびりと、元気でいて下さい。妄言多謝。